日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ

2008年　夏号　No. 51　(2008年8月17日 発行)

発行: 日本行動分析学会　理事長　藤　健一
603-8577 京都市北区等持院北町 56-1　　立命館大学文学部心理学研究室内
FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)　　URL: http://www.j-aba.jp/
E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会 2008 年度事業計画 ..... 各委員会
学会賞の選考が始まります ..... 研究教育推進委員会
学会 blog，web site に情報提供して下さる方を募集します ..... 広報委員会
自主公開講座報告: 徳島ＡＢＡ研究会：春の特別講座「学校でここまでできる！
　一人ひとりの子どもを伸ばす特別支援教育」 ..... 猪子秀太郎
ニューズレター新連載企画開始にあたって
　— 海外で学ぶ学生、海外で働く学生 — ..... 杉山尚子
ABA 体験記 (1): 刺激と興奮に満ちた ABA ..... 野田 航
ABA 体験記 (2): 驚きの連続であった初 ABA ..... 久保 尚也
連載: いま、こんな研究しています (6) ..... 中村道子
編集後記 ..... ニューズレター編集部

日本行動分析学会 2008 年度事業計画

以下の事業計画案が，2008 年 8 月 10 日の会務総会にて承認されました。

1．2008 年度事業計画案について

現理事会の任期最終年度の 2008 年度は、次の事業を行ないます。

1. 「行動分析学研究」の刊行
2. ニューズレターの発行
3. 年次大会 (第 26 回) の開催
4. 出版企画の実施
5. 各種公開講座の企画・開催
6. 国内外の関連諸学会との連携
7. 学会賞 (論文賞)・(実践賞) の選考
8. 学生会員への海外学会参加助成
9. 倫理に関する時事情報の収集・情報交換
10. 学会 HP・データベースなど広報媒体の充実・利用促進
11. 「行動分析学研究」バックナンバーの販売
12. 学会事務局体制の見直し
13. 会則改定の具体案の検討
14. 会員名簿の発行
15. 学会理事・監事選挙の実施
16. 理事長選挙の実施

2. 機関誌編集委員会

1. 機関誌の発行
   - 23 巻 1 号　特集号　仮称「エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端」
   - 23 巻 2 号　一般論文

3. 出版企画委員会

1. 出版物として、「研究法としての研究倫理：研究行動を促進する方法としての行動的倫理学」を編集完了し、2009 年の早い時期に出版を実現する。ミネルバ書店からの発刊を予定している。
2. 中国における自閉症を主とした応用行動分析の中国語テキストについては、JICA の推進などの推移をみて、会員に執筆を依頼する。具体的出版期日は未定であるが年度内に出版社、著者、章立てについては決定する。

4. 研究教育推進委員会

1. 公募型の公開講座
   - 広い地域で開催できるよう広報し、主催者候補に声かけします。
2. 委員会企画の公開講座・シンポジウム
   - 年次大会において、実行委員会と共同で教員向けの研修会を企画し、学校心理士認定協会に、この研修会への参加にとって学校心理士の資格継続ポイントが付与されるように申請します（「教育セッション」として実施しました）。
   - 他学会と連携で公開講座を開催します。
3. 学会賞
   - 論文賞および実践賞の募集と選考を行います。
4. 行動分析学が学べる大学の資料の更新
   - 広報委員に協力して，データベース化（cgi 作成）を支援します。
5. 学会が主体になって進めるその他のプロジェクトの推進
   a. 学会アーカイブの運営を支援します。
   b. エビデンス特集号の編集を後方支援します。
   c. 行動分析学の卒論・修論のデータベースの利用を促進します。

5. 国際・渉外委員会

1. ABA に関する活動
   - ABA に対し、2007 年度の J-ABA 事業報告書ならび 2008 年度の事業計画書を提出する。
   - 2008 年 5 月に開催される ABA 年次大会の ABA Expo において、J-ABA の活動を紹介するポスター展示を行う。昨年度に引き続き、学部以前から米国在住の学生のために、資料の提供と会員有志提供の書籍の贈呈を行う。
   - 2008 年 5 月に開催される ABA の International Development Committee ならびに Affiliation Chapter Meeting にリエゾンとして出席する。
2. J-ABA 内部における活動
   - 「日本在住学生会員 ABA & SQAB 参加助成事業」における、公募、選考を担当する。なお、SQAB 参加者に対象を広げることで、応募締切は 3 月下旬に変更する。
   - 広報委員と提携し、ABA 参加助成を受けた学生 2 名による ABA 体験記をニューズレターに掲載する
   - BCBA 資格の日本への導入の可能性を検討する。

6. 倫理委員会

1. 倫理問題に関する時事情報（倫理問題に関して国の関係省庁から示される指針や通達など）を収集し、学会ブログ（http://blog.j-aba.jp/）などを通じて、随時会員に紹介する。
2. 倫理問題に関する他学会との情報交換・相互交流を促進する。現在のところ確定している企画は下記の通りである。

   日本動物心理学会第68回大会（常磐大学、9/13〜15）における下記講演会への「日本行動分析学会会員のうち動物実験に従事している者」の参加費を無料とする。
   題目：「動物実験倫理指針の運用と課題」
   日時および場所：未定
   講演者：鍵山直子 (財団法人　実験動物中央研究所)
3. その他、倫理問題に関する各種情報を引き続き収集する。

7. 広報委員会

1. ニューズレター
   - 年4回の刊行: 50号は6月8日に刊行済み。51号は総会報告を中心に，年次大会終了後に，52号と53号は，それぞれ11月下旬と3月下旬を目処に刊行する。
   - 新規連載企画の実現 (2007年積み残し)。
   - 冊子体配付希望者が昨年度より増加。
   - 印刷方式の変更 (50号より実現)。
2. 学会ウェブサイトの管理・運営
   - 内容，更新頻度については，現状を維持。
   - アルバイト程度の支出範囲で，表現の洗練化を検討。
3. 「行動分析学が学べる大学」運営の改善
   - 情報更新催促メールの送付。
   - 「学べる大学」掲載情報を，いつでも自由に更新できるweb pageを作成し公開する。
   - 「卒論・修論データベース」と同形式を採用。
   - 投稿内容を広報委員会で確認した上で掲載。
   - 「行動分析家がいる大学」情報の併載を検討。
4. ブログの活用
   - ニュースソースの開拓: 情報提供員 (?) 設置 (2007年積み残し)。
   - 日本行動分析学会以外の各種研究会，シンポジウムなどの情報のうち，日本行動分析学会会員に伝える価値のあるものを，日本行動分析学会のブログに提供する。
   - ローカル情報を集めるために，関西，関東，その他，色々な地域に提供員がいることが望ましい。
   - 多様な活動範囲，多様な学会に関わっている人から，情報提供を受けたい。現在，広報委員会だけで入手できない情報は，応用行動分析，特別支援教育，学校教育，獣医学，医学，看護，福祉，理学療法など。
5. メーリングリスト
   - beemailの普及宣伝。

学会賞の選考が始まります

研究教育推進委員会　浅野・島宗

今年は３年に一度の論文賞選考の年にあたります。2006 年度に学会賞の規定が改訂され、3 年ごとに論文賞を選考するようになってから初めての選考となります。

論文賞の対象となるのは、機関誌『行動分析学研究』の第 20 巻-22 巻に掲載された、すべての論文です。

選考は、理事が務めます選考委員による記名投票と、会員の皆さまによる無記名投票の合算によって行います。選考委員の１票は５点、会員の１票は１点で合算し、得票合計点が最上位の論文を選びます。

会員の皆さまには、９月下旬以降に投票用紙を発送します。論文賞としてふさわしいと思われる論文に、１票を投じてご返送下さい。

論文賞の目的は、我が国における行動分析学の優れた研究の促進および活性化です。基礎、応用、あるいは理論的分析において、さらなる発展へとつながりそうな画期的な研究をお選び下さい。

会員の皆さまのご協力をお願いします。

なお、参考までに、歴代の受賞論文は以下の通りです。

第１回: 望月　要・佐藤方哉（2003）. 行動分析学における”パーソナリティ”研究　行動分析学研究, 17(1), 42-54.

第２回: 小田史子（2004）. オペラント条件づけによる子イヌのトイレトレーニング: 家庭における室内トイレトレーニングの介入事例 行動分析学研究, 18(1), 10-24.

第３回: 中野良顯 （2005）. 行動倫理学の確立に向けて：EST 時代の行動分析の倫理. 行動分析学研究, 19(1) , 18-51.

実践賞の候補者推薦も、常時、受け付けております。社会的な課題に、行動分析学を応用して取り組んでいる個人や組織をご推薦下さい。候補者は非会員でもかまいません。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも対象となります。

推薦の〆切は２月末日です。推薦に必要な書式は、学会 web サイトからダウンロードできます。

なお、参考までに、歴代の受賞者は以下の通りです。

第１回: 高畑庄蔵氏（当時富山大学教育学部附属養護学校）

第２回: 野口幸弘氏（大野城すばる園）

第３回: 山崎裕司氏（高知リハビリテーション学院）

第４回:

- 刎田文記氏（国立職業リハビリテーションセンター）
- アニマルファンスィアーズクラブ
- 京都市立総合支援学校（全７校）

学会賞の目的や選考方法などについては学会 web サイトの「学会賞: 論文賞規定」をご覧下さい。学会賞に関するお問い合わせは、担当理事までどうぞ。

学会 blog，web site に情報提供して下さる方を募集します

広報委員会　望月 要

広報委員会では、学会 blog や web site を通して、会員の皆様に、少しでもお役に立つ情報を迅速にお届けしようと努力しております。各委員会の協力もあって、学会 blog には以前より沢山の情報が掲載されるようになってまいりました。しかし、まだまだ、私達の眼に触れずに埋もれている貴重な情報があると思います。

そこで広報委員会では、blog や web siet に情報提供して下さる方を募ります。資格は特にありません。お願いする仕事は、御自分の周辺で目

や耳にした情報のうち、日本行動分析学会の会員に知らせる価値があると思われるものがあったら、広報委員会に知らせて戴くことと、情報源が御自身で参加しているMLや、個人的な通信の場合は、blogやweb siteへの転載許可を取って戴くことだけです。気が付いたときにお知らせ戴ければ、それで結構です。義務やノルマはありません。

現在の広報委員のメンバーが、関東在住で基礎行動分析を専門としているため、特に、関東以外の地域の催しに関する情報と、応用・実践に関する情報が不足しております。以下のような情報を提供して戴ける方を、特に歓迎致します。

- 日本各地で催される講演会、講習会、シンポジウム、研究会などの情報。
- 地域に密着した各種情報。
- 応用行動分析、特別支援教育、学校教育、獣医学、医学、看護、福祉、理学療法などの分野に関する、学会、講演会、講習会、シンポジウム、研究会などの情報。
- 日本行動分析学会会員向けの求人、研究助成、奨学金などの情報。

自薦・他薦は問いません。御協力戴ける方は、お気軽に、moc@main.teikyo-u.ac.jpまでご連絡下さい。御協力をお願い致します。

自主公開講座報告: 徳島ＡＢＡ研究会：春の特別講座「学校でここまでできる！一人ひとりの子どもを伸ばす特別支援教育」

鳴門教育大学附属特別支援学校　猪子秀太郎

徳島ABA研究会は，応用行動分析学の考え方を特別支援教育に活かすための研修を行う目的で，2004年に発足した自主学習会です。現在，徳島県内の小学校や養護学校の教員，施設等関係機関職員，大学院生など30名余りがスタッフとしてABA研究会を運営しています (徳島ABA研究会HP　http://abanet.ddo.jp/tokushima-ABA/)。

徳島ABA研究会では，毎月の月例研究会，毎年夏休み期間中に延べ4日間開催される応用行動分析サマースクール，9月から年度末まで行われる事例研究への支援，3月はじめに行う春の特別講座などの活動を行っています。

今回，春の特別講座を行動分析学会の自主公開講座として開催しました。春の特別講座では，応用行動分析学や特別支援教育の第一線で活躍する専門家の講演と，サマースクール参加者が学んだことを現場で活かした事例研究の成果報告の2つを行っています。以下に実施の要領と概要を報告致します。

1. 講座タイトル：徳島ＡＢＡ研究会：春の特別講座「学校でここまでできる！一人ひとりの子どもを伸ばす特別支援教育」
2. 開催日時：2007年　3月1日（土）13：30〜17：00
3. 場所：鳴門教育大学附属特別支援学校体育館
4. 参加人数：約100名
5. プログラムと概要

(1) 講演　13：30〜15：00

演題：　特別支援教育によって成長する子ども・学校・保護者

講師：　奥田健次先生，桜花学園大学人文学部准教授

概要：　現在，文部科学省の主導のもと，全国の学校において特別支援教育が展開されているが，必ずしも全ての事例において理念に沿った支援や教育が行われているわけではない。様々な法

令の改正や，特別支援教育の理念を浸透させるための研修等が行われているが，これらが未だ十分ではないと言う実例が全国のあちこちで見られる。これらの事実を直視し，改善のための方策を考え実行するという地道な取り組みが，まだまだ必要であろう。特別支援教育における応用行動分析学の貢献としては，この春の講座のように，子どもたちの問題を取り上げた事例研究を数多く積み重ね，発表していくことが考えられる。(奥田先生の指導事例を記録した VTR が紹介され) この自閉症の児童に対する「買い物指導」の VTR の中にも，標的行動の選定，強化システム，行動連鎖形成のための修正手続きといった，様々な行動分析学的な方法論が活かされている。家庭生活や将来の職業生活に般化させるための標的行動の選定や，有効な指導方法を，こうした事例研究によって見いだすことにより，その子ども自身の成長だけでなく，保護者や教師，ひいては学校や地域といった大きなシステム自体も成長していくといえるだろう。

(2) 研究発表会（ポスター発表）

概要： 徳島 ABA 研究会では，応用行動分析学の基礎を学び，それを個別指導計画の作成から指導の手だての立案，教材作成や教室の環境設定，問題行動への対処などに活かすための思考力や実践力を育成することを目的として，毎年夏休みに延べ 4 日間，応用行動分析サマースクールを開催しています。さらにサマースクール参加者が 9 月以降に行う事例研究に対して，Web 上に事例研究支援データベースを提供し，ABA 研究会スタッフが様々な助言を行っています。2007 年度には，桜花学園大学人文学部准教授の奥田健次先生にも，事例研究に対する助言をいただきました。

春の特別講座では，こうした小学校，養護学校教員を中心とする事例研究の成果をポスター発表し，参加者との間で質疑応答を行いました。今回のポスター発表題目一覧は，以下の通りです。

発表番号及び題目

1. 小学部低学年の知的障害児に対する登校時、一人で上靴に履き替えるための指導
2. 小学部低学年の自閉症児に対する休み時間, 離れたところにいる教員に行き先を伝えてから遊びに行くことができるための支援
3. 小学部中学年の知的障害児に対する登校時に自ら教室に入るための支援
4. 小学部中学年の自閉症児に対するコミュニケーションカードを使って遊びの要求を伝えるための支援
5. 小学部中学年の知的障害児に対するスケジュールの中に提示したカードを取り、カードに示された活動ができるための支援
6. 小学部中学年の自閉症児が保健室に「しつれいします」と言ってから入るための指導
7. 小学部高学年の自閉症児に対するカードを使って自発的に遊びを要求するための指導
8. 小学部低学年の自閉症児にワークシステムを使って自立課題をやり遂げることを指導する
9. 小学部中学年の自閉症児に、タイマーがなったらスケジュールにもどり、次の活動に移ることを指導する
10. 小学部低学年のダウン症児が、決められた個数の食べ物を一人で食べることができるための支援
11. 登下校時の着替えの後、更衣室で上靴のかかとを踏まずに履く
12. 通常学級低学年における基本的学習態勢の獲得～自主的に授業の準備ができるようにする～
13. 保育士の問題解決的思考に及ぼす応用行動分析学の研修効果
14. 家庭との連携による中学部重複障害生徒の体重管理
15. 小学部高学年のダウン症児に対する給食前、自分からエプロンを着けることができるための支援

16. 小学部高学年の自閉症児に対する登校時、一人で教室に行くことができるための指導
17. 小学部低学年の肢体不自由児が物を落としてしまったとき、「〇〇先生、とってください」と要求するための支援
18. 小学部高学年の肢体不自由を伴う知的障害児に対する机拭きができるための支援
19. 中学部アスペルガー症候群生徒に対する授業の参加率をあげるための指導
20. 高等部自閉症児に対する友達や教員の目を触りにいく行動を減らすための指導
21. 高等部自閉症児に対する特定の女子生徒を触りにいく行動を減らすための指導
22. 小学部高学年の自閉症児に家庭で約束を守ることを指導する
23. 小学部高学年の自閉症児にペットボトルとふたの弁別を指導する
24. 小学部高学年の自閉症児に一人で給食準備を行うことを指導する
25. 中学部自閉症生徒に余暇の活動から次の授業への切り替えを行うための指導
26. 小学校中学年通常学級における教師の指示に対する従事率を高めるための介入とその効果について
27. 小学部低学年の自閉症児がお茶を吐き出さずに飲むことができるようにする

ニューズレター新連載企画開始にあたって
― 海外で学ぶ学生、海外で働く学生 ―

杉山尚子　山脇学園短大

毎年５月末のメモリアルデーの週末から開催される国際行動分析学会（ABAI1）の会期中には、ABA Expo というイベントが行われ、ここでは、ABAI の支部となっている世界各国の行動分析学会が、それぞれの活動を紹介するポスター展示を行う。わが日本行動分析学会 J-ABA は、90 年代のはじめごろから、日本酒を準備して（近年は桜花学園大学の奥田健次さん差し入れの和菓子も振る舞われる）、ブースを作る。このブースには、日本から参加した多くの学生も集まってくる。同時に、米国に留学し、行動分析学を学んでいる学生も集まってくる。図１のように、その数は年々増え続けている。

筆者の記録では、最初に米国に留学した学生は、慶應義塾大学で行動分析学を学んだ後、1978 年にカンザス大学大学院に入学した出口光氏（（株）メキキ）である。その後、田崎美弥子さん（慶應義塾大学⇒カンザス大学大学院）、島宗理さん（慶應義塾大学⇒ウェスタン・ミシガン大学大学院）、遠藤清香さん（慶應義塾大学⇒オハイオ州立大学大学院）、是村由佳さん（明星大学⇒ノース・テキサス大学大学院）、竹島浩司さん（東京学芸大学⇒ウェスタン・ミシガン大学大学院）、竹田正樹さん（東京理科大学⇒カンザス大学大学院）、鷲尾幸子さん（慶應義塾大学⇒ウェスタン・ミシガン大学大学院⇒ネバダ大学大学院リノ校）、白石真之さん（岡山大学⇒ウェスタン・ミシガン大学大学院）、林裕介さん（慶應義塾大学文学部西洋史専攻⇒ノース・テキサス大学大学院⇒ウェスト・バージニア大学大学院）と続いた。これらの方々は、現在ではすでに学位を取得し日本に帰国して活躍している方、そのまま米国に残って就職している方、現在も在学中の方と、さまざまである。中には、日本で博士号（明星大学）を取得し、米国で就職した清水裕之さんのような方もいらっしゃる（快挙！）

近年、J-ABA のブースはもっと賑やかだ。それは、大学学部以前から米国に学び、あるいは育ち、日本で行動分析学を学ぶことなしに、ABAI

の舞台に登場するようになった学生諸君が増えてきたためである。はじめはてその存在を知ったのは、1998 年の ABAI のことだった。その直前、拙著『行動分析学入門』を上梓した私は、共著者マリア・マロットに手渡すために、一冊 ABAI に持参した。すると、マリアは、「せっかくだから、会期中、その本を書籍展示会場に置いて、閲覧できるようにするとよい」と言ってくれた。日本語の本なんか興味を持つ人がいるのかと思ったが、ほどなく、その効果は現れ、ある日、展示会場で書籍を眺めていた私は、知己のない米国人教授から呼び止められ、「あなたが、この本を書いたナオコ・スギヤマか？　私の指導学生に日本人がいるのだけれど」と話しかけられた。その学生というのが、後に大阪市立大学大学院に進学された山口徹生さんである。

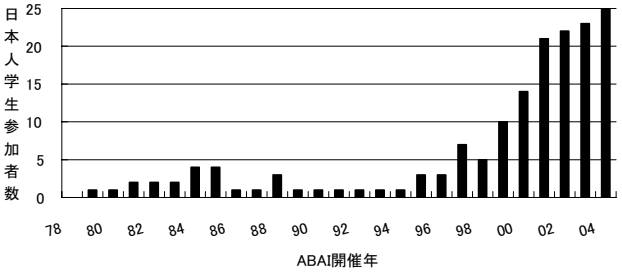


図 1　ABAI に参加する日本人学生数

その後、2002 年頃から、行動分析学の勉強を米国でスタートする学生が少なからず存在することをわかってきた。彼らは、時に ABA Expo のブースを訪れ、日本から参加した学生や教員たちとの情報交換を楽しんでいるようだった。そのうち、米国在住のまま、J-ABA の会員にもなり、時には J-ABA の年次大会にも参加してくださる糸井まどかさん、藤原真由さんなどのような方も出てきた。J-ABA はその動きに応え、彼らに日本の行動分析学の情報を提供するために、昨年度から、日本語で読める文献のリスト、日本の大学のプログラムなどを「日本語で」提供するほか、会員のご協力で著書を寄贈する企画などを開始した。著書の寄贈の呼びかけを旧 BML（現 beemail）で行ったところ、彼らの中には、その呼びかけを閲覧していた者もおり、本を目当てに j-ABA のブースを初めて訪れてくれた。

こういうわけで、行動分析学はますます国際化の波が著しい。その動きを会員の皆様にお知らせしようと、広報委員会の望月要先生が、ニューズレターの新しい企画をご提案くださった。ABAI は世界の大学の行動分析学のプログラムを紹介しているが、公式な大学案内では見えないこともたくさんある。多くの日本人が米国のさまざまな大学、さまざまな職場で活躍している。それらの生の声を会員にお届けしようというのが、この新しい企画である。次号から、順次、掲載して参りますので、ご期待ください。

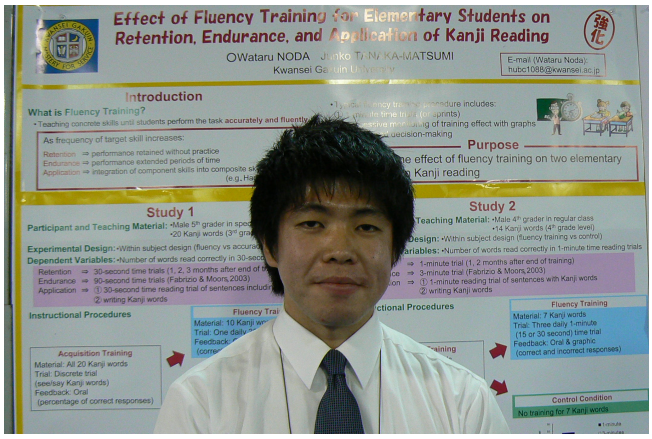
＊かつては ABA あるいは ABA:International と表記されていたものが、いつのまにか ABAI となった。今年、会長のジャネット・トワイマンに、「いったい何とテクスチュアルするのか？」と聞いたところ、「わからない」と言う。一方、そばにいた事務局長のマリア・マロットは、笑いながら「アバイ」だと答えた。それを受けて、ジャネットは「ABA:International でよかったのに」と言ったので、どうやら事務局長の発案とみえる。

ABA 体験記 (1): 刺激と興奮に満ちた ABA

関西学院大学文学研究科総合心理科学専攻心理学領域博士課程後期課程 2 年　野田 航

このたび、日本行動分析学会から「日本在住学生会員の ABA/SQAB 参加に対する助成」を受け、今年の 5 月 23 日から 27 日にかけて、シカゴで開催された第 34 回国際行動分析学会（ABA）に参加してきました。今回のような助成があることで、最先端の研究に触れることができ、今

後の研究の励みにもなりました。心より感謝しております。



今回、ABA 年次大会への参加・発表は初めてでした。また、アメリカ上陸も初めてだったため、不安もありましたが興奮で一杯の 5 日間でした。アメリカに出発する前は、大会プログラムをじっくりと見ながら興味のあるセッションのページに折り目をつけていると、ただでさえ分厚いプログラムがさらに分厚くなってしまいました。アメリカに到着してからもプログラムをかぶりつくように見ながら、前日の夜遅くまで参加するセッションをどうするか悩むような状態でした。私の研究分野は行動の流暢性（Behavioral Fluency）で、日本においては研究数が少ないため、流暢性に関するセッションは可能な限り全て参加するようにしました。

まず初日は ”Precision Teaching & Standard Celeration Charting”（講師：John Eshleman、Clay Starlin、Henry Pennypacker、Jesus Rosales-Ruiz、Abigail Calkin）のワークショップを朝 10 時から夕方 5 時まで受けました。このワークショップでは、論文でしか出会えなかった先生方と直接会うことができ、実際に Standard Celeration Chart に記録する 1 分間 Timing の練習をしたりしながら、Precision Teaching の基礎を学ぶことができました。ワークショップ中は、きめ細かな対応をしてくださり、私の拙い英語に対しても暖かく個別にフォローしてくださいました。ワークショップ参加証も Standard Celeration Chart を模したものに先生方の直筆のサインが入っていて、非常に配慮が行き届いていると感じました。その後夕方 6 時からは ”Getting Children With Autism and Their Teachers Started in Fluency Based Instruction”（講師：Kelly J. Ferris、Holly Almon-morris、Kathleen S. Laino、Krista Zambolin）のワークショップを夜 9 時まで受けました。自閉症児の療育において実際に流暢性指導を行っているビデオを見たりすることができ、論文を読んだだけでは曖昧な想像しかできなかったことがよく理解できました。どちらのワークショップも、豊富な配布資料（参考文献一覧、DVD など）があり、その後自分でも学習することができるように配慮されていました。

2 日目以降のセッションで特に印象に残っているのは、Thomas S. Critchfield が司会をしていた ”Evidence-Based Practice Reviews: Behavioral Education Interventions” のシンポジウムです。Lawrence J. Maheady、Charles Merbitz、Thomas S. Critchfield、Cathy L. Watkins という、そうそうたるメンバーの発表で、どの発表者も非常に話をするのが上手で引き込まれてしまいました。発表内容も、Classwide Peer Tutoring、Precision Teaching、Equivalence-Based Instruction、Direct Instruction というアプローチで、日本ではほとんど研究されていないため、非常に勉強になりました。それから、Joanne K. Robbins が司会をしていた ”Morningside Academy: What’s New?” のシンポジウムも非常に印象的でした。Instructional Design を用いた学業スキルの支援をしている学校だけあり、Morningside の先生方の話し方は非常にユニークで理解しやすく感銘をうけました。実際に Morningside での指導で用いられている Choral Responding を使いながらの発表も興味深かったです。

自分のポスター発表としては、”Effect of Fluency Training for Elementary Students on Retention, Endurance, and Application of Kanji

Reading” というタイトルで 25 日に行いました。私は、基礎的学業スキルの指導をテーマとして、流暢性に基づく指導プログラムの研究を行っています。今回発表した研究は、通常学級および特別支援学級に在籍する児童 2 名に対して、流暢性指導を用いて漢字の読みスキルを指導した結果に関するものでした。ポスター発表に関しては、J-ABA では流暢性指導の研究はほとんどないのですが、ABA では非常にたくさん発表されていることが驚きでした。流暢性に関する研究をしている先生方が何名か話を聞きにきてくださり、拙い英語ではありましたが何とか発表を終えることができました。発表の際に意見をいただいたことや、他の発表から学んだことは、今後研究を進めていく中でとても貴重なものとなりました。

それから、ABA のプログラムそのものに関してではないのですが、海外にいる日本人の行動分析の研究者と知り合いになれたことは、ABA に参加してよかったと思うことの一つとしてあげられます。アメリカの特殊教育の現場で行動分析を用いた指導を行っている方や、アメリカの療育会社で研究をなさっている方などとお話する機会を得ることができたのは非常によい体験でした。また、日本の研究者の方々とも食事をしながらお話する機会を得ることができたこともおおきかったと思います。ABA に参加することは、こういったネットワーク作りという意味でも非常に意義深いことだと思いました。

繰り返しになりますが、このたび ABA 参加に対して日本行動分析学会から助成をいただきましたことに、感謝申し上げます。ありがとうございました。

ABA 体験記 (2): 驚きの連続であった初 ABA

駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士後期課程 2 年　久保 尚也

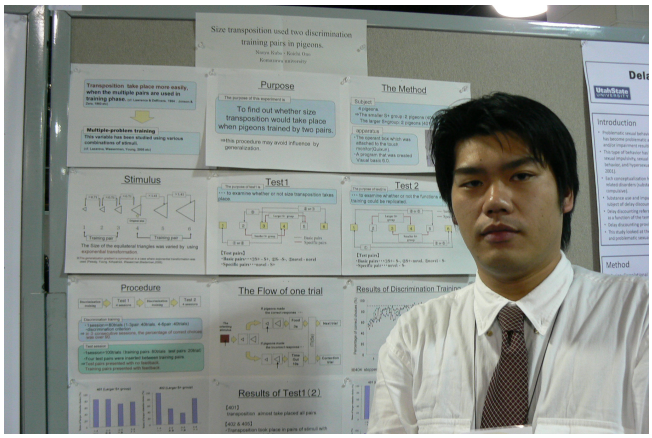
今年５月に行われたシカゴでのＡＢＡに参加，ならびに発表させていただくという貴重な体験をさせていただきました。今回，私のＡＢＡでの体験を一部ではありますがご紹介できればと思います。

ＡＢＡへの参加そして発表は私にとって今回が初めてでした。そのため，最も不安に感じたのが『英語力』でした。”日本国内での学会と異なり，自分の研究内容を説明するのも，質問されるのも英語で行われる ･･･ 。自分はちゃんとした対応ができるのだろうか ･･･ ”。英会話を習いに行くたびにその不安が付きまといました。

そんな不安感とともに，国際学会で自分の研究を発表することができる，行動分析の本場であるアメリカの学会の空気を肌で感じられるという高揚感も同時に持ち合わせていました。そして現地のシカゴに降り立ち，会場となるヒルトンシカゴに到着すると本当に今まで自分は不安感を持っていたのだろうかというくらい，この高揚感が強くなったのです。”世界各国の行動分析家が数日間集う学会に参加し，発表できる” そう考えるだけで胸が高鳴りました。

ABA では，何もかもが珍しく驚きの連続となりました。特に驚いたのは次の３つの事柄でした。１点目は，プログラム内容の豊富さ，ポスターセッションにおける発表の多さです。セッションが多いために１日のスケジュールを決めるのが非常に大変でしたが，スケジュールを立てること自体が今回の旅における楽しみのひとつでもありました。ポスターセッションは日本とは比べものにならないくらい数多くの研究が発表され，ウマやウシ，イヌなどの珍しい被験体を使用している興味深い研究や，様々な領域の最新の情報に接することができました。２点目としては，ポスターセッションにおいて，会場にいる人の多くがお酒を片手にセッションに

参加していることでした。ビールやワインを飲みながら研究に関して熱い議論を交わす…，日本では考えられない光景を目の当たりにしました。3 点目は，ＡＢＡバッシュというパーティです。このパーティは大会期間中，２回行われたのですが，２回目のＡＢＡバッシュはダンスフロアが用意され，参加者の多くがダンスを楽しむというアメリカならではのものでした。私がなぜ驚いたかというと，日本の著名な先生方も一緒になってダンスを楽しんでおられ，しかもダンスが非常に上手であったためです。ABA に参加しない限り，このような様子を目にできることはないのではないかと思います。



さて，私自身の発表についてですが，ＡＢＡに参加していた日本の先生方や海外の先生方が発表を見に来てくださいました。自分のつたない英語の説明にもかかわらず海外の先生方が熱心に聞いてくださったこと，また，自分の研究に興味を抱いてくださったことは私にとって非常に嬉しい出来事でした。また，発表後にひとり秘かに味わった充実感，国内で初めて発表をおこなったときと同じような新鮮な気持ちも最高のものでした。

今回の旅では，自分と同様に日々研究に精進している各国の大学院生と交流する機会が多々あり，使用している実験装置についての情報交換，研究の内容や，お互いの国についてなど，さまざまなことを語らう楽しい時を過ごしました。そのとき，自分と同様にハトを用いた研究を行っている学生がみな同じような苦労をしているのが分かり，お互いのことをあまり知らないうちから妙な親近感を勝手におぼえていたりしました。

以上，ＡＢＡに参加した数日間のうちのほんの一部の体験を書かせていただきました。いまシカゴでの体験を振り返り，この原稿を書いていると，たった数日間のことではありましたが，シカゴで過ごした日々がいかに刺激的なものであり，今後の自分の研究生活において有益なものであったかということを改めて感じさせてくれます。また今回のＡＢＡでは，ポスターセッションなどで質問をしたくても言葉にならないといった状況が多々ありました。その点がこの旅唯一の心残りです。しかし，次回参加するときまでにはある程度の英語力を身につけ，今回以上によりよい経験ができるようにしようといった新たな目標をもつこともできました。

最後になりましたが，今回，貴重な経験をさせていただく機会を設けてくださった方々，現地にてお世話になりました先生・諸先輩方，まことにありがとうございました。この場をお借りし，厚く御礼申し上げます。

連載: いま、こんな研究しています (6)

駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士後期課程　中村道子

私は，駒澤大学大学院博士後期課程に在籍し，成人を対象に系列学習を促進させる諸要因の検討をしております。系列学習と言いますと，エビングハウスの実験のように記憶に関する研究と思われがちだと思いますが，私が行っている研究はそれとは少し異なっています。ここでは，

私が行ってきた系列学習研究についてお話させていただきます。

たとえば,「赤い くつ」「青い くるま」という 2 つの単語カードの語順を訓練したとします。この場合,「赤い くるま」や「青い くつ」という直接訓練されていない順序反応はみられるのでしょうか？結論から申しますとそれは可能で,上記の例のように，同じ順序位置に属する刺激 (1 番目は「赤い」と「青い」，2 番目は「くつ」と「くるま」) 同士が互換性を有するということがさまざまな基礎研究から示され，それらの刺激のまとまりは系列クラスと定義されています (Lazar, 1977; Stromer & Mackay, 1993)。このように，順序位置に基づく刺激の互換が可能であるならば，1 刺激ずつ刺激を置換しても直接訓練されていない系列が生成されるのでしょうか？私は，系列置換訓練という新たな訓練方法を用いて新系列の生成に関する検討をしました。系列置換訓練とは，たとえば,「赤い ちいさな くつ」という 3 項目系列を訓練した後に,「赤い」を「青い」に置換した「青い ちいさな くつ」,「ちいさな」を「おおきな」に置換した「赤いおおきな くつ」,「くつ」を「くるま」に置換した「赤い ちいさな くるま」という 1 刺激を新しいものと置換した 3 種類の系列を訓練することです。この訓練の後,「青い おおきな くるま」という直接訓練されていない新系列ができるのか？をテストしました。私の場合は対象が大学生ですので，上記のような単語カードではなく恣意的刺激をタッチパネルモニターに提示し系列反応を求めるという形式で実施しておりますが，結果としては置換した刺激による新系列は生成されませんでした。つまり，丁寧にスモールステップで訓練が実施されているようにみえても，新系列を生成する上では適切な学習方法ではなかったのです (中村・小野, 2007)。

この実験を受けて，どのようにすれば系列学習が促進されるのか?をテーマに，様々な操作を導入して研究を進めてきました。現段階では，置換した刺激自体を再認 (刺激の同定) させる操作や，参加者自身が生成した系列を視覚的にフィードバックすること，また，1 番目に属する刺激を最初に訓練し，2 番目に属する刺激を次に訓練するというように，刺激が属する順序位置と訓練する順番を一致させることが新系列の生成を促進する要因であることが分かってきました。

また，日常場面への応用を考える上で重要なのが「効率性」だと思います。つまり，少ない訓練で多くのことができれば，それに関わる人たちにとって大きな手助けとなるでしょう。そのような観点から，複合刺激を用いて 1 つの系列を訓練したところ，刺激要素を分離した際にどちらの要素に対しても順序機能の転移がみられました (Nakamura & Ono, 2008)。たとえば,「赤いと書いてある赤いカード」→「ちいさなと書いてある黄色いカード」→「くつと書いてある青のカード」の順に各刺激の順序を訓練すると，色のみの系列反応（「赤カード」→「黄色カード」→「青カード」），文字のみの系列反応（「赤い」→「ちいさな」→「くつ」），および文字の異なる新たな文字系列（「青いと書いてある赤いカード」→「おおきなと書いてある黄色いカード」→「くるまと書いてある青いカード」）の 3 種類の新系列が生成されたのです。

このように，系列学習は刺激等価性と同じく基礎と応用が密接に絡み合っている分野のひとつだと思っております。日々，実験室にこもって研究をしている私としては，もっと現場で活躍されている方々の「現場では，こんなことで困ってる」というような苦労話をお聞きしたいと思っているのですが，なかなかチャンスがありません。現場のニーズから新たな実験が生まれ，それを現場に戻すというような応用と基礎の相互作用が今後できればいいな？と，考えております。

引用文献

Lazar, R. (1977). Extending sequence-class membership with matching to sample. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior,* **27,** 381-392.

Nakamura, M., & Ono, K. (2008). Transfer of Sequential Response with Compound Stimuli. *34nd Annual ABA Convention, ABA Program,* p. 288.

中村・小野 (2007). 成人における系列置換学習. 日本心理学会第 71 回大会発表（東洋大学）論文集　757 頁

Stromer, R., & Mackay, H. A. (1993). Human sequential behavior : Relations among stimuli, class formation, and derived sequences. *Psychological Record,* **43,** 107-131.

編集後記

ニューズレター編集部

文字通り《熱気に満ちた》第 26 回年次大会が終りました。ホストを務めて下さいました横浜国立大学の大会開準備委員会の皆様はじめ参加した全ての皆様、素晴らしい年次大会をありがとうございました。ニューズレター編集部としては、長らく懸案になっておりました新しい連載企画を、国際・渉外委員会の杉山尚子常任理事から御力添えを戴き、漸く立ち上げることができました。この連載では、海外で活躍する日本人若手行動分析学関係者に、毎号、海外のホットな情報を寄せて戴く予定です。御期待下さい。

ニューズレター編集部よりお願い

- ニューズレターには個人情報が記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニューズレター
編集部　望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp